

文系学生への情報基礎教育について

—問題点と改善に向けての提言—

Problems of Basic Information Literacy for Liberal Arts Students and Their Solutions

海老澤成享・菅野宏

(Ebisawa Masanari Kanno Hiroshi)

【要 約】

文系学生への情報基礎教育はどうあるべきかという命題について、筆者等はこちら数年間にわたり、多方面からの調査研究を進めてきた。

卒業生を受け入れる企業側からの要望、新入生を提供してくれる高校側の実情等について調査してきた。今年度は学内の他教科の教員が情報基礎教育に対し、どのような要望や意見をもっているか調査した。

本稿においては、その調査結果を報告すると同時に、これまでの調査結果も含めて、現在の情報基礎教育の問題点を指摘し、それらの解決へ向けての施策を提言する。

キーワード：文系学生 情報基礎教育 改善への提言

liberal arts students study of basic information literacy

propositions for solving the problems

1. はじめに

ここ何年か、文系学生への情報基礎教育についての調査研究を続けて、

- ・高等学校における進路指導、数学教育の現状 (2002年度)
- ・企業が求める人材と、大学教育への期待 (2001年度)
- ・企業情報システム指向の教育展開の試み (2003年度)

のテーマで、教育の課題や問題点、講義内容や展開方法の考察および提案を行ってきた。

今年度は、これらを踏まえて、他学科の教員から見た情報基礎教育の現状に対する意見、要望事項などの調査を加えて、改めて現状の問題点、解決への提言を述べたいと思う。

2. 情報基礎教育の具体的な教育内容について

最初に、情報基礎教育の具体的な内容をあげておきたいと思う。

大学によって、それぞれの項目に対するウェイトの置き方や指導方法の違いはあろうが、大まかなところでは、次ページの表1のような内容であると思う。

大学の教育現場から見ると、各家庭へのパソコン・インターネットの普及、各人の携帯電話所持や、高校教育への情報科目導入などによって、表1のいくつかの項目については、かなりのレベルまで操作方法や知識を得ている学生と、これとは対照的に、現状でも情報機器にはほとんど白紙状態の学生とが入り混じている。いわば、情報基礎教育に関する学習や体験が、

表1 情報基礎教育の内容

項目	学習状況例
コンピュータの仕組みに関する知識	*
パソコンの使い方	
Windows 搭載パソコンの基本操作	**
タッチタイピング	**
日本語ワープロソフトの使い方	***
表計算ソフトの使い方	***
プレゼンテーション用資料作成ソフトの使い方	**
データベースソフトの使い方	*
マルチメディア情報の扱い方	**
コンピュータネットワーク関連	
基礎知識	*
学内ネットワークの利用の仕方	**
インターネットの利用法	**
電子メールの利用法	**
ホームページの作り方	*
情報倫理	
著作権に抵触する行為とそうでない行為の知識	*
ウィルス、不正アクセス等から身を守るための知識	*
プライバシー権を守るための知識	*
個人情報保護法に関する知識	*
情報システムに関する知識	*

註： 学習状況例の記号は、次のような意味で使用している。

- ***： かなりの時間をかけて教育している
- **： ある程度時間をかけて教育している
- *： 軽く一通り説明する程度の教育である

二極化の様相を呈するようになってきているのである。後者の未学習・未体験者は、年々減少傾向にあって、現状では、全体の20%弱程度ではないかと思われる。

3. 他教科の教員が情報基礎教育に望んでいること

今まで、大学への進学前の高校、就職先の企業からみた情報基礎教育へのつながりや意見、要望事項などを取り上げて、調査・研究を行ってきたが、大学教育での他教科から見た情報基礎教育への期待や意見、要望について、ほとんど情報収集をしていないことに気付いた。

そこで、今年度は、専門科目、ゼミナール演

習、卒業論文指導などを担当する何人かの教員に、ヒアリング形式で話を伺った。内容をまとめると次のようになる。

3. 1. 文書処理に関すること

(1) レポート・論文の構成に関すること

まず、ワープロソフトを使用して文書作成は行えるが、それ以前の問題として、レポートや論文の構成（章立て、起承転結など）を設計できない学生が多いことが取り上げられた。

卒論に取り組む以前に、レポートや論文をまとめた経験がないか、きちんと指導されていないという指摘である。つまり、この種のことをしっかり身に付けていない学生が多いことが、クローズアップされた。

(2) レポートや論文に、図や写真などを挿入する処理に関すること

次に、文書の中に、イメージスキャナーを使って参考文献などから図や写真を、文章との関係でもっとも妥当な位置に、貼り付ける処理がうまくできない学生が多いことが話題となった。たとえば、操作上のやりやすさから、図や写真を必要以上に大きくして1ページ分に納めてしまうなどの現象である。また、これに関連して、それらの挿入に当って、文章中にその図や写真について、まったく言及しない学生も多いという。

さらに、図番号やタイトルを付けたり、出典を付記するのも、思うようにできないことが指摘された。

以上の指摘を総括すると、情報基礎教育はソフトそのものの機能を一通り教えるのではなく、たとえば、ワープロソフトの場合、論文やレポート作成における基本事項からアプローチしなければならないことを示しているのではないだろうか。筆者等が今まで提言している「オブジェクト指向の情報基礎教育」の意味づけが明確になった事例として捕らえることができると思う。

3. 2. 表計算ソフトに関すること

(1) 比率の意味、利用法に関すること

最初に取り上げられたのは、いわゆる、構成比率、基準年度との100%比率などについて、まったく意味を理解していない学生が多く存在することであった。

表計算ソフトの数式表現を学べば、たとえ、分母、分子が逆になっても、2つの項目を取り出して、式に入れて計算した結果から、正しい解が得られるのではないかと、つまり、分母、分子の確認ができるのではないかと思っていた。

しかし、現実には、分数計算の分母、分子に何をもちくればよいか以前の問題で、比率という言葉を知っただけで、早くも「わからない世界」、「自分には関係のないこと」のような反応になっているというのである。

大学で算数、数学の基本まで遡らなければ、表計算ソフトを学ぶための例題すら理解できないことは、まことに残念なことといわざるを得ない。

(2) グラフの表現、解説、選択に関すること

一般に、表計算ソフトを使って、グラフを作成することについては、ほぼ問題なしとの判断であった。たしかに、グラフ作りは学生たちが喜んで実習に精を出すテーマである。

しかし、収集したデータから、どのグラフを選ばよいかについての判断力が不足していることが指摘された。たとえば、どんなデータの場合でも円グラフのみとか、グラフ表現はいつも棒グラフしか選ばない学生が存在することをあげられた。

これに関連して、さらに、表示されているグラフを読む力がないことに話が発展した。ゼミナールで輪読する文献にグラフによる状況表示があっても、そのグラフを説明しないことが多いという。これはグラフが何を表現しているか、十分把握できないことが原因なのかもしれない。

グラフを読むことは、小学校時代から社会や理科の教科書などで体験していることと思うが、なぜこのような現象が起こるのだろうか。

(3) アンケートの集計利用に関すること

専門科目の講座展開で、アンケートを取って、その集計結果をまとめ、発表したり、報告書を提出するような場面から、次のような要望事項があがった。

アンケート用紙を設計する基本的な知識を知らないため、思いつくままに質問を並べたり、全体に流れの悪い用紙を作って、アンケートを取ってしまうことが多く、アンケートが有効利用できないことすら起こるとの指摘があった。

その結果、集計処理では、単に項目ごとの集計を棒グラフで示すだけに終るケースが多く、簡単なクロス集計くらいは出せるようにできないかとの要望である。

たしかに、表計算ソフトには、簡単にクロス集計を取る機能が付いているので、少し時間を掛ければ、この範囲まで講座の中に入れることは可能であろう。

ここでも、適切な例題を取り上げて表計算ソフトを指導することの必要性を再認識した。

(4) 基本的なレベルの統計処理に関すること

統計計算について、専用のSAS、SPSSなどのパッケージソフトまでは必要としないレベ

ルで、簡単な統計処理が求められるとき、ごくごく当たり前に使われる統計的な知識が不足しているとの指摘があった。

この指摘について考えると、文系学生の大部分は、高校時代に初歩的な統計に関する学習がないまま、大学へ進んでいるという事実につき当る。学んでいる範囲は必修とされる数学Ⅰの「場合の数と確率」だけなのである。従って、大学へ入って統計関連の講座を履修するか、独学で統計を学ぶ以外には、この要望をクリアすることはできないことになる。

初歩的な統計の知識として、データの最小値、最大値、分布の中心を示す代表値（平均、中央値、最頻値など）、ばらつきを示す代表値（分散、標準偏差など）と共に、2つのデータ群の比較、相関図、回帰直線などについて、学んでおいてほしいとの要望であった。

もちろん、これらは、表計算ソフトを使って求められることであり、その意味も理解していることが必要となる。

3. 3. ネット利用に関すること

(1) ブラウザーに関すること

インターネットからの情報収集について、もっと上手に検索すれば、適切な情報を集められるはずなのに、レベルの低い情報の範囲に留まっている学生が多いという。その原因について伺ってみると、操作方法の問題よりも、検索への意欲不足と、十分時間を掛けて調べ尽くす姿勢の欠如などが指摘された。

また、インターネットから得た情報について、出所を明記することを忘れる学生が多いこともあげられた。上記、参考文献からの図や表などの引用の場合と同様の指摘事項である。

(2) メーラーに関すること

携帯電話の普及に伴って、教員と情報交換するメールの多くが、携帯メールのため、連絡程度の内容の場合はよいとしても、資料の添付ができないので、制約条件になっている。

なぜ、大学が付与しているメール機能を使わないのだろうか。恐らく、その原因は常に手元にある携帯と、家や大学のパソコンの前での実施による違いなのであろう。

もちろん、両者を使い分けている学生もいるので、ぜひ、見習ってほしいものである。

また、メール交換のエチケット（タイトルの付け方、文頭・文末の書き方など）について、よく学んできてほしいとの要望もあった。

たとえば、卒業論文の一部の原稿を添付して担当教員に送付するのに、タイトルなしであったり、「先生こんばんは」とされていたりして、まるで友人同士の情報交換と同レベルで送付することには、良識を疑わざるを得ないということであった。

さらに、文中に差出人の名前のないメールを平気で送付する場合も多いため、誰が送付したかわからないメールは、開かずに削除してしまうと、宣言している教員もあった。

(3) ネット販売、ネットオークションに関すること

ネットビジネス関連の講座を担当している教員からの不満として、ネット販売されている商品を購入した経験や、ネットオークションがどんなものか体験していない学生が多いことは、予想外だったと指摘された。

実際に買い物やオークションに参加しなくとも、この種のネット利用がどんなものか、画面を見るだけの体験でもしておいてほしいというのである。

3. 4. その他（プレゼンテーション、情報倫理など）

(1) プレゼンテーションに関すること

プレゼンテーションソフトの利用については、十分使いこなせない学生がいたり、使用できても、色の組み合わせがあまりにひどいもの（どぎつい原色の使用など）、テーマや表示スライドの内容とまったく関係のないイラストのアニメーションを入れ込んでいるものなどへの指導を希望する意見がでた。

(2) 情報倫理に関すること

インターネットからのデザインやイラスト情報などは利用しない方がよいとの声があるなど、一通り理解しているような発言もあるので、この分野についてはそれなりに理解されていると受け止められていることがわかった。

(3) その他

他に、パソコン教室での実習などに見られる現象として、仲良しの2、3人が並んで座っている場合、一人が落ちこぼれでも、周りで支援

してかろうじてついていける学生の存在である。この種の学生は、その後自分一人で復習する機会を作っていればよいが、このままの状態を続けていれば、これらの操作を身に付けずに終ることになるとの指摘もあった。

4. 過去2年の調査結果から

現在の情報基礎教育の問題点を述べる前に、過去2年間に卒業生を受け入れる企業側の要望(資料2)、新入生を提供してくれる高校側の実情(資料3)について調査した結果から一部を紹介する。

4. 1. 企業が情報基礎教育に望んでいること

(1) 大局的な2つの方向について

2001年に行った「新卒大学生に対して企業が期待する人材」のヒアリング調査によれば、企業が大局的に見て大学側に求めているのは、次の2つの方向であった。

- ・社会人として各種の課題へ的確に対応できる能力を持つ人材の育成：

個々の教科について、1つ1つ理解、修得しているだけでなく、それらを組合せて使うことのできる総合的な能力が求められている。

- ・自分のやりたいことへの決意や認識など、自分の進路に対する強い執着心：

自分のやりたい仕事への拘りをもつこと、どこでも、どんな仕事でもよいといった傾向への反省を求めていることがわかる。

(2) 大学での情報教育への期待

情報教育の具体的な内容については、ほぼ、「2. 情報基礎教育の具体的な教育内容」のレベルで、ほとんどの企業人から異論や反論はあがらなかった。

しかし、ソフトウェアのライセンス問題、コンピュータ・ウイルス、新ビジネスとその仕掛けなど、特定項目の追加や、総まとめ的な要求として、1つの大きなテーマに対して、複数のソフトウェアを有効活用して、多角的な解答を作成するような課題をこなしてきてほしいという要望があった。

なお、タッチタイピングについては、ある程度のスピードで打鍵できれば、キーボードを見ないでの打鍵までは要求していないこともわかった。

他に、コメントがつけられているものとして、次のようなものがある。

- ・コンピュータから離れて思考できる能力も重要
- ・コンピュータを利用しての表現、分析を考え、実施する姿勢が重要
- ・良いものを選ぶ眼を養うこと
- ・情報を取捨選択できる能力 など

4. 2. 高校の進路指導、数学教育の位置付け

2002年に行った「高校の進路指導、文系コースの数学教育」のヒアリング調査によれば、高校の2年次で多くの学校では、文系・理系のコース分けが行われる。そして、コース選択のポイントは数学の好き・嫌い、成績評価が大きな要因になっていることが伝えられた。

これには、文系の場合、大学の入学試験に数学が受験科目にほとんど入っていないことも、大きな問題点になっていることがわかった。かつては、「英語・数学・国語」が重要科目になっていたが、現状では、この中の数学だけが大幅に軽減されていることがわかった。

数学は、大学受験に必要なない教科に位置付けられているため、必要最小限のレベルで学んでおけばよいとの判断になっている。

5. 現在の情報基礎教育の問題点

以上、「3. 他教科の教員が情報基礎教育に望んでいること」、「4. 過去2年の調査結果から」において紹介した内容を総括してみると、次のような現在の情報基礎教育の問題点が浮かび上がってくる。

5. 1. 問題点の背景にある大学の現状

このことは一情報基礎教育の問題ではないが、志願者全員が大学へ進学できるようになりつつある現在、大学は最高学府、高等教育機関というイメージとはかなり異なった存在になっている。残念ながら、学生の平均的学力の低下および向学心の低下は、すでに世の中で暗黙の了解になっているところであろう。

大手企業などでは、明文化はしないまでも、大学院卒が従来の大学卒レベルで、四大卒は大学という形式ではあるが、従来の高卒レベルとの判断すらあるという。

従って、大学教育の現場においても、かつて

は学生自身が、学習の理解のために不足していると分かれば、黙っていても、自分でその部分をカバーしていた。しかし、現在の多くの大学生には、この種のことは期待できない。

たとえば、かつてはある種の使い方を教えれば、それを応用して課題を解くことができたが、現在では、一般的な使い方の他に、それに類似した応用事例まで学ばせなければ、適用できない状態なのである。

5. 2. 教員の期待とマッチしない受講生のねらい・学力

授業経験の中から、出席回数の不足者を除いて、単位取得できなかった受講生を調べると、課題やレポートの提出、あるいは、期末試験の成績が悪い学生が該当している。理由は、受講生が、講座内容に学力面でついていけなかったか、この講座に向学心を起こさなかったかではないかと判断される。

とりわけ、対象が選択科目の場合、学生は何らかの理由で、その科目の単位を取得しなかったから履修登録し、講座にも出席していたはずなので、教員が期待していたものと、受講生のねらいや学力がマッチしなかったことを考えなければならぬ。

もちろん、こうした落ちこぼれの発生は、担当教員の授業展開とそのフォローにも課題があるかもしれないが、それ以前に、その講座を履修するときの必要条件をその受講生が満たしていたかどうか、問題ではないかと思う。

特に、表計算ソフトの数式や関数の利用を含む情報系の科目で、この種の状況を見る人が多いように思われてならない。

5. 3. 高校生の数学の学力低下と受講科目のばらつき

構成比率については、他学科教員の要望の項で述べたが、表計算ソフト利用の場で、具体的な問題を解かせると、比率関連の事項に加えて、不等号 ($<$ $>$ \leq \geq) や関数の扱いなど、社会的に叫ばれている数学の学力低下を実感するケースが頻繁に起っている。

また、高校時代に学習した数学科目を調べて見ると、基本とされている「数学Ⅰ」でさえ、必ずしも履修済みとはいえない学生も存在する。さらに、筆者等の調べたデータによると、

「数学Ⅰ」のみ、あるいは、「数学Ⅰ」と「数学A」しか履修していない学生が全体の24%を占め、その他の組み合わせとして「数学Ⅱ」、「数学B」などが加えられているが、受講科目には相当のばらつきがある。

従って、どんな項目までは履修済みであるというような線を引くことができない状況のもとで、大学教育は展開せざるを得ないのである。

5. 4. 学生への個別対応が難しいこと

学生による授業評価アンケートでは、通常、受講者数によって大規模、中規模、小規模の講座を比較すると、受講者数の小さい方が大きい講座に比べて評価が高いことがわかる。

もちろん、授業の静かさや教室の環境などが影響していることもあろうが、もう1つの見方として、少しでも個別対応を可能にできる講座の実現が、期待されていることを表わしているのではないだろうか。しかし、現実には、この種の講座においても、なかなか個人対応することは難しく、少数ながら脱落者が後を絶たないのである。

わからなくなったら、オフィスアワーを利用して、研究室に相談に来るようにアナウンスしても、残念ながら、現れる学生は非常に限られている。

恐らく、学生ごとに、学習経歴と教科ごとの学力差があって、理解度に違いを生じているのだろうが、この辺りのことはまったく計り知れない状態での対応になっている。

そんなとき、教員側が手掛かりとして求めたくなるのは、受講生の履修歴情報ではないだろうか。

5. 5. 教員間のコミュニケーション不足

既に述べたように、他教科の教員から情報基礎教育についての意見、要望事項をヒアリング調査している中で、各教員間での教科内容に関するコミュニケーションが不足していることを痛感した。もちろん、同系統の教科については、カリキュラム展開の検討などで、教員間のコミュニケーションが取られているのは当然のことと思う。

しかし、今回の他教科の教員からの視点で見た情報基礎教育に対する意見や要望事項の中には、より良いコミュニケーションが取られてい

れば、クリアされていた問題が随所に存在するように思われてならない。これについて、反省するところは、学科内の教員間でも特定の学生についての授業態度、大学生活などを話題にして情報交流することはあっても、ジャンルの異なる教科について、講座内容まで踏み込んで意見交換することは、残念ながら、ほとんどなかったという点である。

今の大学は、従来のように、どのように講座を展開するかは、担当教員のみが知り、すべてを握っているといった時代ではなくなっているはずである。

とりわけ、現在の情報基礎教育では、各教科の展開や社会人となってからの仕事での利用などを考慮した指導が必要で、他教科との関連を十二分に意識してカリキュラムを展開しなければならないと思う。

6. 今後の情報基礎教育改善への提言

6. 1. ミスマッチへの対策 =履修条件の明示と単位取得認定制度の導入=

前項のような環境の中で、講座が展開されているため、今まで以上に、各講座への履修条件を明確にすることが必要な時期に来ていると思う。もちろん、現在でも一部の教科について、たとえば、「情報基礎B」の履修は、「情報基礎A」の単位取得者とするなどの履修条件が講義要項などに記載されているものもあるが、どちらかといえば、かなり曖昧な条件が多いばかりでなく、その内容を厳しくチェックして、履修を取り消すようなことが行われていない傾向にあるのではないだろうか。

かつて、ある外資系大手コンピュータメーカーが行っていた情報技術者教育のカリキュラムでは、各人が学習計画を立て、選んだコースにある多くの講座を定められた順序に従って受講する体系ができていた。従って、1つの講座を受講するには、それ以前に受講すべき講座をすべてクリアしておかなければならなかった。このような考え方を導入することが、今こそ、必要なのではないだろうか。

さらに、受講する講座の前後関係ばかりでなく、内容面についても、たとえば、この講座を履修する学生は、「高校の数学Bの確率と確率

分布の知識を必要とする」といった条件を明記する必要があるのではないだろうか。ミスマッチを解決する手段として、このような方向への努力も必要であると考ええる。

外国語関連の学科などでは、すでに採用されている簡単なテスト、面談などの実施によって履修の必要性を判断する単位取得制度を、情報基礎科目にも採用することが必要な時期に来ていると思う。

各家庭へのパソコン、インターネットの普及と、高校教育への「情報」科目導入があっても、新入生の情報系の知識、技能にはばらつきが激しく、画一的な情報基礎教育で授業の円滑な運営ができなくなりつつあるのが、現状ではないだろうか。

6. 2. 学力低下と学習内容のばらつき対策 =高校の数学教育の取入れ=

すでに、一流大学の理工系学部で、高校時代に物理を履修せずに入学してくる新入生のために、1年次の専門科目の中に特別な講座を設けて、高校の物理を教えている現状を耳にした。このような対策を立てないと、学部の中心ともいべき理工系の専門科目についていけない学生が出てきたことが、講座設置の理由だったという。

こうしてみると、高校で履修できなかったり、履修しなかったり、しっかり学習してこなかった数学のうち、常識としても必要な部分を大学の講座の情報基礎科目に取り込むことを積極的に実施する方向はどうであろうか。

ただし、講座名を正面から数学などと表現しないで、表計算ソフトと絡めた形式のものとするとよいかもしれない。これは、各講座で履修登録の理由を聞くと、「情報系の科目は取っておきたいから」、「将来役に立つ科目と思うから」などが、圧倒的に上位を占めるからである。

6. 3. 個別対応への対策 =履修者情報の開示=

学生への個別対応が行われぬ理由の1つとして、講座を担当する教員に、その講座を履修する学生についての情報が知らされていないことがあげられると思う。

この典型的なものは、非常勤講師の場合であろう。大学のカリキュラム遂行の中で非常勤講

師が果たす役割は非常に大きく、非常勤講師の講座支援について、関係者は大変な配慮をされているが、現状の講座展開では、担当する非常勤講師に、履修生についての情報はほとんど与えられない。もちろん、講師側から情報を求めないことも原因の1つかもしれないが、履修生が何人か、最初の講座に出て始めてわかる場合も多い。そして、何回かの講座が行われた後で、履修者リストが配られるだけでこれ以外の情報は何ひとつないまま講座は展開され、成績評価となって終了する。従来の大学教育では、それでよかったのかもしれない。しかし、前述のような環境における大学においては、改善が必要ではないだろうか。

なお、上では非常勤講師を例にあげて述べたが、常勤教員についても、レベルの差はあっても、同じようなことがいえるのではないだろうか。とりわけ、新入生の高校時代の情報についても参考資料として配付されることが望ましいと思う。

プレゼンテーション上手になるための条件の中に、プレゼンターは相手（視聴者）が誰かを知り、その視聴者の立場に立って、彼らは何を知りたがっているかを考えることが必要とされている。

恐らく、プレゼンテーションが対象とする講演会などは、それほど多くの回数はないであろう。これに比べて、10数回もの連続した講座を担当する教員に、履修生の情報がほとんどないのはどうしてだろうか。

少し論点はずれるが、このことに関連して、企業の人事部門の担当者が就職志願者の成績表を見るとき、教科名とその評価値だけでは、どんな内容の講座を履修してきたのか、まったくわからない、たとえば、1教科について1行のコメントでも記載されていれば、どんなに助かることだろうとの意見を伺ったことがある。

従って、上記の履修者情報の開示には、利用価値のある情報が提供されなければならないことを、付け加えておきたい。

6. 4. 教員間のコミュニケーション不足対策 ＝共同担当の授業＝

前述の他学科の教員からの要望と、両教員のコミュニケーション強化の意味でも、1つの講

座を文系専門分野の教員と情報系の教員がペアで講座を受け持つスタイルはどうであろうか。

開講に当っては、両教員の綿密な事前検討が必要なことはいうまでもないが、このスタイルの講座を1、2年続けることによって、体験的に学生の問題点や疑問点を把握することができるようになると思う。このプラス効果は、教育上価値ありではないだろうか。

もちろん、年度を通してすべての授業をペアで対応する必要もないはずであろう。

そう考えると、あるいは、情報系教員でなくとも、レベルの高い情報教育の演習を担当するTA（ティーチング・アシスタント）を加えることによって、現状を上回る改善ができるのではないだろうか。ただし、このような対応では、教員とTAの教育内容の解釈が一致していないために、逆効果になる場合があるので、両者による意思疎通を図っておくことが必要なことはいうまでもない。

7. おわりに

以上、ここ数年調査研究を続けているテーマ「文系学生への情報基礎教育の問題点と改善への提言」について、高校教育、大学の他教科教員、そして、企業の求める人材という視点と、現在の大学が置かれている実態という面から見てきた結果をまとめると、次のようになる。

情報基礎教育の内容では、

- ・総合的情報技術の利用教育
- ・オブジェクト主体の情報技術利用教育
- ・社会生活での利用、企業情報システム指向の情報技術教育

が、筆者等の提言である。

今年度は、これらのうち、授業展開上必要であり、かつ、欠如していると思われる事項について述べてきた。

もちろん、これらはあくまで筆者等の一考察に過ぎない。また、我々の提言について、すでに実施されていたり、いろいろな斬新な試みをなさっている方々もおられるであろう。

同じような環境で情報基礎教育に関係しておられる諸兄から、視点の異なるご意見やご叱正、反論などを頂戴できれば幸いである。

終りに当って、ゼミ生やご担当講座の授業指

導などにご活躍中の貴重なお時間を割いて、筆者等のヒアリング調査にご協力頂いた他教科の先生方に、心からお礼申し上げます次第である。

参考資料 :

- 1) 海老澤成享・菅野宏著「表計算ソフト利用教育から見た文系学生の数理知識についての一考察」目白大学人間社会学部紀要 創刊号 pp.1-9 (2001)
- 2) 海老澤成享・菅野宏著「文系学生への情報基礎教育の現状と課題—企業が求める人材と大学教育についての一考察—」目白大学人間社会学部紀要 第2号 pp.15-25 (2002)
- 3) 海老澤成享・菅野宏著「文系学生への情報基礎教育における数学の展開—高校の進路指導、数学教育の調査結果から—」目白大学人間社会学部紀要 第3号 pp.11-19 (2003)
- 4) 海老澤成享・菅野宏著「文系学生へのこれからの情報教育はどうあるべきか?—企業情報システム指向の教育展開を試みる—」目白大学人間社会学部紀要 第4号 pp.1-13 (2004)